

# スクミリンゴガイ情報第2号（水稻）

令和7年12月3日  
愛知県農業総合試験場  
環境基盤研究部病虫害防除室

発生が多い地域では、冬期対策により越冬量を減らしましょう

## 1 本年の発生状況

6月下旬及び7月下旬に県内水田 47 地点（1 地点あたり 2 ほ場）で実施した巡回調査において、スクミリンゴガイの発生が確認された地点の割合（発生地点率）は 36% で、過去 10 年と比較して平年並の状況でした（前年 43%、平年 34%）（図）。

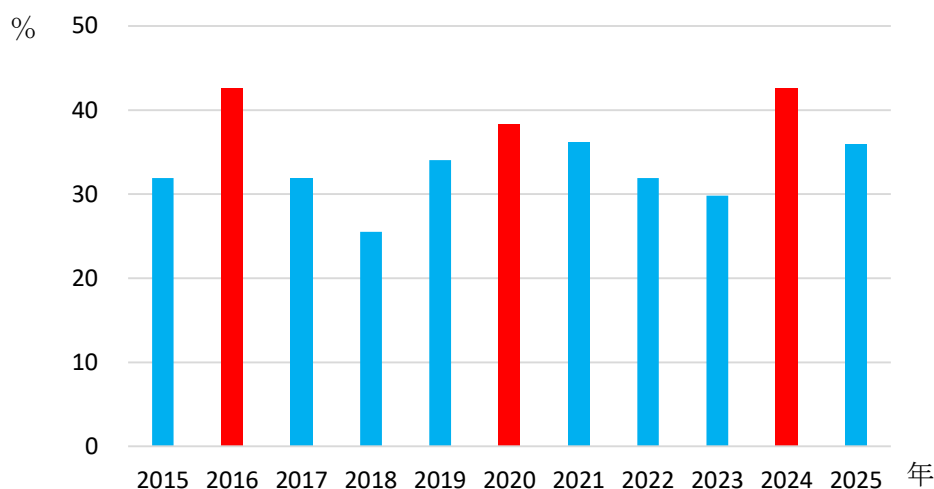


図 巡回調査 47 地点（94 ほ場）におけるスクミリンゴガイの発生地点率（6～7月）

## 2 スクミリンゴガイの越冬について

スクミリンゴガイは水温が 14℃以下になると活動を停止し、水田や水路で土中に潜って越冬します。翌春、気温が上昇し、水田に水が張られると活動を開始します。このため、水田及び水路における越冬個体への対策が重要です。

冬期の気温が高いほど、スクミリンゴガイの越冬量は多くなる傾向です。また、冬期の気温が低くても、発生地点率は一定の割合以上で推移していることから、近年スクミリンゴガイの発生が続いているほ場では注意が必要です（表）。

表 スクミリンゴガイの発生地点率と前年度の冬期の気温（発生地点率：%、気温：℃）

年度	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
発生地点率※1	32	43	32	26	34	38	36	32	30	43	36
平均気温※2 （前年度 12～2 月）	5.3	7.2	6.0	4.7	6.8	7.8	6.6	5.3	6.1	7.5	5.7
最低気温※3 （前年度 12～2 月）	1.8	3.3	2.1	0.9	3.0	4.1	2.8	1.5	2.2	3.6	2.0

※1 6 月下旬及び 7 月下旬の発生予察調査において発生を確認した地点の割合

※2 12 月～2 月の各月平均気温から平均値を算出（アメダス地点：名古屋）

※3 日最低気温の月平均について、12 月～2 月の各月の数値から平均値を算出（名古屋）

### 3 防除対策

#### (1) 冬期耕うん

スクミリンゴガイを物理的に破砕し、越冬量を減らすため、土壌が乾燥して硬い厳冬期（1～2月）に耕うんを行いましょう。防除を目的とする際は、トラクターの走行速度を遅く、ロータリーの回転を速くし、土壌を細かく砕くように耕うんすることで破砕効果が高まります。また、厳冬期に行うことで、貝を寒風にさらし、殺貝効果を高めることができます。

#### (2) 水路の泥上げ

スクミリンゴガイは寒さに弱い※ため、厳冬期（1～2月）に水路の泥上げを行い、寒風にさらすことで越冬量を減らすことができます。また、水路の泥上げは越冬場所をなくすことや、同時に雑草が取り除かれることで、翌年の餌をなくすことにもつながります。局所的でなく、地区全体で取り組むと効果が高まります。

なお、掘り上げた泥については、未発生のほ場や地域に持ち込まないように注意してください。

※0℃環境下の場合、20～25日で死亡。

#### (3) ほ場の均平化

スクミリンゴガイは水中でないと摂食できず、水深が浅いと活動が制限されます。一方、凹凸があるほ場では、田面の深いところで貝が活動しやすく集中的に食害が生じます。ほ場の傾斜や凹凸をなくすため、ほ場の均平化を行いましょう。

### 4 留意事項

作業後の農業機械に本種が付着し移動することで、発生範囲が拡大するおそれがあります。作業を行うほ場の順番を考慮するとともに、農業機械を移動させる際は泥をしつかりと洗い落としましょう。また、今年スクミリンゴガイの被害が見られたほ場では、移植期の薬剤散布など他の防除技術の組み合わせを検討しましょう。

### 5 その他

スクミリンゴガイの防除対策については、令和4年3月31日発表の「スクミリンゴガイ防除実証試験成果の紹介（水稻）」や、農林水産省が公開するマニュアル等（<https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/siryou2/sukumi/sukumi.html>）（令和7年版）を参考にしてください。

冬期に耕うんを行うことで、他の病害虫における次作の発生量を減らすことにもつながります。詳しくは、10月1日発表の「水稻の秋期管理情報第1号（ニカメイガ、イネ縞葉枯病、イネ白葉枯病）」を参照してください。